2017/6/26　(C)繊研新聞　1面

気持ちよく楽しく働く

オフィス最新事情

オフィスが進化している。ミーティングルームやカフェなど、社内の至るところにクリエイティブな空間を設ける動きが目立つ。狙いは、社員同士のコミュニケーションの活性化。気軽に会話が生まれる環境を作り、企画や営業に生かす。社員のモチベーションや会社へのロイヤルティーを高める上でも、気持ちよく働ける楽しいオフィス空間を作ることが欠かせなくなってきた。（佐々木遥、中村維）

カフェスペース（上）、著名人に混ざって社員の顔写真も飾られている喫煙ルーム（サンエー・ビーディー）

飲食無料のカフェテリア（サマンサタバサジャパンリミテッド）

気軽に会話が生まれる環境作る

サンエー・ビーディーは5月、本社を東京・二子玉川から青山一丁目に移転したのを機にオフィス改革を実施。社員同士のコミュニケーションを深めるため、ガラス張りのオープンな空間にし、随所に打ち合わせスペースを設置した。一つの事業会社として、セクショナリズムに走られても困る。立ち話でも部署を超えて気軽に話せるように工夫し、社員が気持ちよく働ける環境を目指した」（前川正典社長）。喫煙ルームも完備。ゆったりとしたソファを設け、「居心地の良いコミュニケーションの場」とした。

今回のオフィス改革は、働き方改革の一環でもある。業界で販売職を中心に人手不足が叫ばれるなか、販売に関してはインセンティブの導入などの施策を進めているが、本社でも気持ちよく働ける環境を整えることで、社員のモチベーションや帰属意識を高める狙いがある。

「引っ越しは、サンエー・ビーディー魅力化プロジェクトの第1弾。職場環境を改善することで、社員の定着率も高めていきたい」という。

デジタル化に対応した工夫も光る。プレスルームの横にECスタジオを併設し、撮影効率をアップ。ランチや打ち合わせに利用できるカフェはインテリアや雑貨にこだわり、SNS（交流サイト）用の撮影スペースとしても活用できるようにした。

各フロアでコピー機を集約し、業務効率も向上。今までは部署ごとにコピー機を配置していたが、1カ所に集めることで、業務の効率化とペーパーレス化を図った。「不思議なもので、人は近くにコピー機があると使ってしまうが、離すことで考えて使うようになる」と早速効果が表れている。

サマンサタバサジャパンリミテッドの新オフィスの最大のテーマは、寺田和正社長の掲げる「日本一楽しい会社」だ。4月、13年間オフィスを構えた青山一丁目から麻布十番に移転。約4300平方㍍のワンフロアに、全ブランドのショールームと執務室を集めた。

広い執務室には、打ち合わせ場所としてログハウスや四畳半があり、飲食無料のカフェテリアの奥にあるガラス張りのパースペースでは、就業後に東京タワーを臨む夜景が楽しめる。手前には、「社長館」と書かれたあんどんの灯るカウンターを設置。表彰者などに鮪がふるまわれるほか、本格的なトレーニングマシンの揃うジムスペースも備える。社員がのびのびと楽しみながら仕事をすることで、そこから新たなクリエイションが生まれる。「社員が楽しくなければ、お客様に感動を与えることができない」との考えだ。

移転効果として、まずコミュニケーションが活性化した。ミーティングの場所が会議室からログハウスやカフェテリアになり、ちょっとした打ち合わせなら執務室内のドリンクスタンドなどで交わすようになったことで「雰囲気が和やかになり、意見が飛び交いやすくなった」という。一方、じっくりと企画やデザインなどに没頭したい際には、1人用のクリエイティブスペースを設けており、個室に区切られた面談室も複数用意している。

移転時には1人につき段ボール2箱までと荷物に制限をかけ、徹底的に"断捨離"を実施。資料をデジタル化してペーパーレス化も行った。移転先が決まってからは各部署の部長も加わった引っ越しプロジェクトチームを結成。社長とミーティングを重ねた。参考のために5、6社のオフィス見学にも行き、社員へのヒアリングも行って構成を固めた。